



マズローの欲求階層性理論は古典として有名ですが、そこから得られる洞察は今なお深いものがあります。今回は「受けるより与える方が幸福です」というキリスト教の有名な命題を同理論から考えてみましょう。

マズローは五つの基本的欲求を二つに分類し、一方の欲求グループを「欠乏欲求」と呼び、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、そして承認の欲求を包摂しました。他方は「成長欲求」と呼ばれ、自己実

「受ける」より「与える」方が幸福？

す。つまり、欲求満足の矢印が自分の体の外側（周囲の人々）から内側（自分）に向かつており、（欠けて

いるものを満たすのに必死なため）自分中心になりやくなります。環境に恵まれた人は、周囲の人々からなみなみと愛情などを注いでもらえます。逆の場合、ほとんど空のコップから他のコップに水を注ぐことは困難になります（他者の成功を褒めるよりも嫉妬する、等）。

欠乏欲求、特に承認の欲求に十分満足した人は、自己実現の欲求に動機づけられる可能性が高まります。確かに、子どもは両親に褒めてもらいたくて勉強するかもしれません。しかし、十分に欲求が満たされれば、他者からの評価に対する関心が良い意味で薄れ、自身の正当な努力に伴う充実感や達成感などが求められるようになっていきます。この場合、努力や優れた才能・人柄などに基づく果実（多くの場合、周囲の人々や社会に益すること）という矢印が自分の体の内側から外側に向かうこととなります。満水のコップから他のコップ

に水を注ぐように、他者や社会に「与える」側になるわけです。

ここで視点を変え、三つの人間関係について考えてみましょう。一つ目は、「欠乏―欠乏」の関係です。彼らは2人とも「受ける」（矢印は互いに自分に向かつている）ことを望んでいて、最初は格好良く振る舞うことができて、やがて化けの皮がはがれ、不仲になりやすいと言えます。二つ目は、「成長―欠乏」の関係です。これには本来あるべき親子関係や師弟関係が当てはまりません（大学の教員は、「教え」授けるべき存在です）。大人同士の場合、成長段階にある方が先に疲れ果てるか、欠乏段階にある方が満たされて成長するかで2人の未来が変わってきます。三つ目は、「成長―成長」の関係です。この場合、両者は共に「与える」（矢印が互いに相手に向かつている）欲求を持って

マズローの欲求階層性

理論による分析

現の欲求が該当します。分類の基準となったのは、欲求の満足に伴う「矢印の方向性」です。たとえば、空のコップに水が注がれるように、（子ども頃は特に）衣食住、治安、愛情や尊敬は両親や周囲の人々から「受ける」必要がありま

重 島 三
大学教授 立大 市立 屋学 古名 経済学 研究科 教授

かし、十分に欲求が満たされれば、他者からの評価に対する関心が良い意味で薄れ、自身の正当な努力に伴う充実感や達成感などが求められるようになっていきます。この場合、努力や優れた才能・人柄などに基づく果実（多くの場合、周囲の人々や社会に益すること）という矢印が自分の体の内側から外側に向かうこととなります。満水のコップから他のコップ

みしま・しげあき 人的資源管理。京都大学大学院経済学研究所 博士。後期課程修了。博士（経済学）。1978年生まれ。